

成瀬 正氏

コロナで行動が制限され、ストレスが溜るが、悪い事ばかりではない。自分の時間が増え、本を読み、考える時間が増えた。昔に買ってあった三島由紀夫の軽いエッセイ「をほりの美学」の中の「学校のをほり」を読んでいたら、「学生が人生に無知であって、考えが浅薄で、いい気なもので、甘い理想家で、虚勢ばかり張ってゐて、そのくせ自信がなくて、、、」という一節に、大学生だった私があまりにもびつたりなので、思わず吹き出してしまった。大学のゼミの時間、級友に「本の要約などいらん、君の意見を言え」とか、先生には「知識ではないかもしれませんが、問題意識では僕の方が数段上です」など、とほざき、尖っていた姿が目

新春に思う



に浮かんだ。それは、無限に広がる未来への恐れと、やりたいことが見つからない焦燥感の裏返しであったのだと思う。

あの頃は、本当に本をよく読んだ。それでも、明確な目標が見つからず、頭でっかちになっただけだった。

中途半端な気持ちで就職して、目先の仕事に追われ、そのうち結婚して家庭を持ち、子供が生まれ、日常の中に埋没している自分が、持っていたと思っていた思想が一枚一枚剥がされ、精

神が痩せ細っていく感覚にとらわれていた。しかし、四十を過ぎ、責任のある仕事がおもしろくなり、仕事に熱中していくうちに、その感覚はいつの間にか消えていた。それは日常という現実には鍛えられ、付け焼刃の思想が洗われ、「頭でっかちの甘い理想家」が「リアリスト」に変貌したという事だったのだろう。それでも、学生の時から今まで、自分の頭で考える事だけは一貫して来たつもりだ。

この一月で七十五になった。後期高齢者に指定され、「お前は老人だ」と決めつけられたようで、いささか不愉快ではあるが、まぎれもない老人である。しかし、老いは一様ではない。今流に言えば、老いも多様性があるという事だ。だから、

固定観念にとらわれず、私流の老い方をしようと思っている。

2008年の春、61でこの会社に来て、リーマンショックで会社の危機という洗礼を受けた事で、今の仕事为天職と思えるようになった。百人規模のこの会社は、縁あって集まった社員を幸せにするツールだと考えている。理想を根底に「リアリスト」として投資家にも魅力のある「究極の社員のための会社」にする事が私の使命だと思っている。

その実現のために「創造的老人」を目ざして歩き続けるつもりだ。

「歩キ続ケテ果二熄(ヤ)ム」(「寡黙なる巨人」多田富雄)

七十五の新春である。

感謝